

文教大学学生における余暇・運動活動の意識に関する研究

深町明夫・中林忠輔

Survey of consciousness to exercise During the sparetime to Bunkyo University Students

by

Akio Fukamachi, Tadao Nakabayashi

I. はじめに

最近青少年の体力の低下や健康問題が盛んに論じられるようになってきた。その背景には社会の変遷からくる種々の環境の悪化があり、特に学生には知育偏重的な受験戦争が大きな影響を与えていると考えられる。

体力(身体適性: physical fitness)は身体的及び精神的な行動・防衛能力、各種機能の充実、ある範囲内での内的及び外的環境の変化に十分適応できるだけの身体的能力などと定義できよう。体力とそれに伴う健康度が最も高いレベルに安定している年齢は学生時代を含む数年ではないかと思われる。従って学生時代は少々無理をしても心身に支障をきたさないようカバーしてしまう時期すなわち悪環境への抵抗力(公害の克服などという考えとは全く別)の強い時期であり、かえって体力や健康を軽視する傾向もある。

また、より高いレベルに鍛えられたいいわゆるトレーニングされた体力は加齢に伴う低下が漸次一定であるならば、低いレベルの者に比べて維持出きる水準は高く、低下度は遅く、効果はより高令まで残ることは定説である。トレーニング効果が増進(プラス)の方向で期待でき、しかも健康安全性の高い学生時代を過信して過すと、将来に禍根を残すことになるのでむしろ積極的に心身を高める努力が良策となる。

体力や健康の保持増進に運動は必須条件であるが、果して学生が前述したことをふまえて認識しているであろうか。もし認識しているとすればどのように実践しているのだろうか。また将来をどのように見通して健康生活を考えているかについても疑問である。

過去に本学学生の体力調査を継続して行ったが、入学後2年程度でもかなり能力低下傾向が認められ、体育実

技指導上大きな助言となった。今回は体力との関連と共に、余暇や運動活動等について実態調査を行い、学生の運動クラブ活動の経験や意識、余暇の過ごし方、運動活動の意識や行い方、健康の考え方、運動やクラブに対するイメージ等についての結果を得た。それを性別、学科別、運動経験別に比較検討すると共に、他大学の傾向や他の研究結果等と照合し、本学学生の実態を把握して、一般体育実技、保健体育理論及び課外活動の指導に生かしたい。

II. 調査について

1. 学生生活における余暇・運動活動についてのアンケート調査(東海大学学生生活研究所編)を、無記名にて、2年次応用体育木曜日、金曜日Aクラス及び体育専修生(1年次を除く)に対して行った。

2. 調査期間は昭和53年6月1日から6月16日であった。

3. 調査対象及び回答数は、男子124名、内訳は国語、社会、数学、理科(以下教育群と略す)43名、体育専修35名、人間科学科46名、女子258名、内訳は国語、社会(以下国社と略す)69名、数学、理科(以下数理と略す)32名、音楽、家庭、英語(以下教育群と略す)63名、体育専修70名、人間科学科24名であり、回答回収率は体育専修約85%それ以外は100%であった。なお対象者の比較グループ分けは、調査数が専修専攻で不十分であった点と、体力の類似した専修専攻等(文教大学紀要第10集、文教大学学生の体力に関する研究 第4報)を考慮して上記のように男子3、女子5グループとした。

4. 調査内容については以下の通りである。

(1) 中学・高校・大学での運動クラブ経験について
入部の動機と続けた理由、途中で止めた理由、運動ク

クラブに入らなかった理由について合致1項目を選択

(2) 学生生活における余暇利用について

住居種別, 通学時間, 昼休み・放課後の過ごし方, 日曜祭日の過ごし方について合致1項目を選択

(3) 運動活動の意識と行い方について

体力の自己診断, 運動の必要性, 運動参加での仲間, 形式, 機会, 時間, 望ましいと思われる内容, 体育的行事への参加意志, 教室・大会開催希望, 健康についての意識等を合致項目選択(教室・大会についての希望は種目を自由回答)

(4) 運動クラブ・体育会に対するイメージについて

運動クラブや体育会に伴う10項目の語句をそれぞれ非常に良い(+3), 良い(+2), やや良い(+1), 分らない(0), やや悪い(-1), 悪い(-2), 非常に悪い(-3)の7段階でイメージによって選択

(注) 各内容の詳細は結果と考察参照のこと

5. 調査結果の処理は調査対象別に回答人数集計し, 百分率を算出した。イメージについては項目毎に平均値を算出した。体力とその必要性の比較などでは χ^2 -検定を用い, イメージについては平均値差を t -検定した。

6. 研究の進め方はアンケート内容に基き, 性別, 学科別に比較すると共に, 運動クラブ経験による意識の相違を, 大学経験者, 中学・高校経験者, 未経験者に分けて比較検討を行う。なお本研究の目的に直接関連のない項目については参考に止めることにした。

Ⅲ 結果と考察

1. 運動クラブ参加の実状と意識について

本調査によると大学で運動クラブに入っている者, 男子47% (58名/124名), 女子24% (62名/258名)であり, 体育会会員約550名が全学に占める割合約12%よりかなり高い比率となっている。小椋らの報告では学内スポーツサークルへの参加は全体で24.6%であり, 国公立別では私立大学が低いとされているが, それに比べても高い。これは本調査対象に体育が占める割合が高いことも一因であろう。また男子は女子と比較して参加度が高く共学への移行における一傾向と見ることが出来る。中学校, 高校での運動経験者を含めると男子約70%, 女子45%となり, 途中退部したり, 進学に従って止めたりした者もあろうが, 何らかの形で運動クラブを経験した者を約半数と見ることが出来る。

運動クラブに入った動機, 続けた理由, 途中で止めた理由, 運動クラブに入らなかった理由について結果を得たが, 学科別に顕著な差はなく詳細に比較する必要もないと思われるので性別に整理した。また中学校, 高校,

大学時代の各選択項目を総計したものを表1から表4に示すが, 大学での理由で10%以上の回答については○数字で順位を併記した。

表1 運動クラブを続けた者と途中で止めた者の入部動機(理由)

動機(理由)	(単位%)			
	続けた者		途中で止めた者	
	男子	女子	男子	女子
1) 技術の向上・獲得(昇段・記録・優勝など)	22④	14⑤	9	11
2) 前にやっていたので入った	19①	14①	25②	12
3) 身体的向上(体力の増進など)	18⑤	13	20③	25③
4) 先生・先輩・友人に誘われて	16	19④	13	18
5) 他の運動をやってみたかった	12②	12②	11	17①
6) 仲間を作りたい	7③	18③	11①	14②
7) 強制的に入らされた	0	1	2	0
8) その他	5	8	9	3

男子が技術や記録, 体力などスポーツの持つ闘争, トレーニング的な志向を示すのに比べ, 女子は自発的要素以上に, 友人等に誘われたり仲間づくりなどに左右されて入部する傾向にある。入部動機をクラブを途中で止めた者と続けた者とを比べると, 男子で技術の向上獲得の比率が低く仲間づくりの比率が高い。女子は前にやっていたので続けたが低く, 他の運動をやってみたかったが高くなっている。

表2 運動クラブを続けられた理由

理由	(単位%)	
	男子	女子
1) 技術の獲得・向上がありおもしろくなった	35②	34②
2) 人間関係がよかった	27①	35①
3) 身体的向上がみられた(練習についてゆけるだけの体力になった)	18③	9
4) 指導者(コーチ・監督)に恵まれた	5	7
5) ライバル(競争相手)に恵まれた	4	3
6) 退部の機会を逃したので続けた	2	3
7) 活動場所・施設に恵まれた	1	2
8) その他	6	7

表3 途中でやめた大きな原因

原因(理由)	(単位%)	
	男子	女子
1) 時間に余裕がなくなってきたため	28②	21①
2) 練習の内容が自分の目的に合わなかった(練習量・方法・方針など)	22①	11②
3) 人間関係がうまくいかなかった	15③	19③
4) 身体的に不利になった(練習についてゆけない, ケガなどを含む)	11③	28
5) 勉学との両立が出来ない(進学も含む)	11	10
6) 経済上の理由	0	0
7) その他	13	10

クラブを続けられた理由は男女類似しており、技術、身体的向上、人間関係などを主なものとし、指導者やライバルの影響は低い比率となっている。

表4 運動クラブに入らなかった理由

(単位 %)

理 由	男子	女子
1) 文化系・生産系のクラブに入った	43 ①	50 ①
2) 自分のやりたいクラブがなかった	17 ②	11 ②
3) 勉学のため	12	7
4) 入る機会を失った	7	7 ③
5) 身体的に不利だった(ケガを含む)	6	9
6) クラブの目的がかたよっていた	2	1
7) 経済上の理由	1	2
8) 学外のクラブ・サークル・道場に入った	1	2
9) 上下関係が厳しく感じられた	0	1
10) そ の 他	11	12

運動クラブに入らなかった理由は文化系クラブに入った、自分のやりたいクラブが無かったが大半を占めている。特に文化クラブに入った者が多いことはクラブの形態、目的の違いこそあれ有意義なことで、丹羽らの報告によれば運動部や文化部経験は情緒安定性に大きな要因となるので精神的側面からも見のがせない。

2. 学生生活における余暇の利用について

(1) 住居、通学時間について

住居はアパート男子54%、女子44%、自宅男子28%、女子37%でほとんどを占め、通学時間は表5の通りであった。これは他の調査項目の参考にとどめる。

表5 通 学 時 間

(単位 %)

	30分以内	30分～1時間	1時間～1時間30分	1時間30分～2時間	2時間以上
男子	50	22	12	12	4
女子	43	17	22	14	5

(2) 昼食時間以外の昼休み・空時間の過ごし方について

昼休み・空時間はどこで過ごすことが多いかとの質問に学生の過していると思われる10項目を挙げ選択回答させた。男子は食堂、体育施設、部室、芝生、女子は教室、食堂、自分の部屋、図書館の順に多かった。また学科別では男子体育が体育施設(37%)人科が部室(25%)、女子教育群が教室(33%)、体育が部室(27%)、人科が食堂(29%)などが多く学科の特性を示すものと考えられる。本学の場合、喫茶店や娯楽施設が大学と隔れている立地条件なので、空時間も学内に留まざるを得ないようだ。

(3) 放課後の過ごし方について

放課後はすぐ下校するか学内に留まった場合何をして過すかの質問に対して、①すぐ下校する(下校してから

の過し方は別に回答)②別に決ってなく何とはなしに過し夕食時に帰る。③気の合った仲間と何かしている。④文化系クラブ活動をしている。⑤運動系クラブ活動をしている。⑥図書館、教室で勉強。⑦その他から選択回答するものである。

男子では、⑤42%、①27%、④19%の順序、女子では①34%、④26%、⑤25%の順序でそれぞれ90%、85%を占めている。学科別では体育男子の79%、女子の68%が⑤を挙げているのは学科の性格上当然と言える。男子教育群、人科は④と⑤がやや同率、女子では体育以外は④が⑤よりかなり多く国社、教育群に顕著である。

運動経験別では、男子大学が⑤86%、中高が①55%、④30%、未経験が④48%、①33%であり、女子大学が⑤65%、①19%、中・高が④40%、①38%、未経験が①48%、④36%であった。

クラブ活動で過す者が男子で61%、女子で51%で非常に多く、調査対象者に占める体育専修生が多いことにもよるが、自主的にサークル活動に励んでいることは望ましいと言えよう。運動と文化を比較してみると体育と男子教育群以外は文化系が大であり、これはサークル数等に影響されていると共に、後述する運動参加意識等に関連があるものと考えられる。また本学の現在のキャンパスではこれ以上のスポーツ活動は物理的に飽和状態で危険でもあるので己むを得ないと思うが、より望ましい姿を求める体育指導者にとって残念なことでもある。

次にすぐ下校する者がかなりの割合(約35%)でおりその理由は男女共アルバイト、する事がない、通学時間がかかるがほとんどであった。アルバイトや女子で帰宅が遅くなる等はうなづけるが、何もすることがなくすぐ下校し帰宅後も莫然と過している者が多いのは、学生としての望ましい過し方、余暇利用等を考える時一抹の寂しさを感じる。

(4) 日曜・祭日の過ごし方について

日曜日や祭日に家にいることが多いか、外出することが多いかでは、男女共4対6で外出が多く、男子の体育、人科、女子の教育群、体育にこの傾向が著しい(5対5との仮説に基ずく χ^2 -検定で5%水準の有意差を認む)。

家での過し方では男子はテレビか音楽を聴く(44%)、身の回りの整理(35%)、女子は身の回りの整理(46%)、テレビか音楽を聴く(26%)、宿題か勉強(16%)が圧倒的に多かった。

外出する者では男子は友人に会う(38%)、娯楽かレジャー(19%)、アルバイト・大学のクラブ(各18%)、女子は友人に会う(35%)、アルバイト(20%)、クラブ(17%)、レジャー(15%)であった。性別、学科別で多少順位差

が認められた。

3. 運動活動の意識及び行い方について

(1) 自己の体力について

今自分の体力に自信があるかを、①充分自信がある、②普通、③自信がない、④わからないから1項目を回答させて得た結果は表6の通りである。表中 χ^2 検定欄にマークを付したのは④を除いて①②③選択者の百分率を算出し、正規分布から理論的に割り出した仮説16%—68%—16%とを検定し、有意差が認められたものである。

($\Delta\Delta$ は1%、 $\Delta\Delta\Delta$ は0.1%の危険率を示す。)

表6 体力の自信について

(単位 %)

性別 グループ	男 子					女 子					
	有	普通	無	不明	χ^2 検定	有	普通	無	不明	χ^2 検定	
学 科	国・社	—	—	—	—	1	51	44	3	$\Delta\Delta\Delta$	
	教・理	—	—	—	—	3	50	44	3	$\Delta\Delta\Delta$	
	教育群	7	51	40	2	$\Delta\Delta\Delta$	1	41	49	8	$\Delta\Delta\Delta$
	体育	9	71	14	6		5	75	20	0	$\Delta\Delta$
人 科	人 科	9	52	33	7	$\Delta\Delta\Delta$	0	43	52	5	$\Delta\Delta\Delta$
	全 体	8	57	30	5	$\Delta\Delta\Delta$	2	54	40	4	$\Delta\Delta\Delta$
	運 動 経 験	16	71	12	2		4	76	17	3	$\Delta\Delta\Delta$
中・高	大 学	3	52	33	12	$\Delta\Delta\Delta$	4	51	37	8	$\Delta\Delta\Delta$
	未	0	33	67	0	$\Delta\Delta\Delta$	0	38	58	4	$\Delta\Delta\Delta$

男子の体育と大学経験者が仮説に類似している他はすべて②自信がない回答傾向にある。女子の体育も危険率こそ低いが傾向は同様である。体力については広義、狭義解釈の仕方等多様であり、莫然と問われた場合、答えにくい点もあるが、反面学生一般にとっては総括的かつ主観的な自己の体力評価はさ程難しくはないとの考え方もある。従って6人に1人の割合で自信がある又はないと答えるとの仮説に立ったが意外に評価が低かった。

過去数年間本学学生を対象に体力測定を実施してきたが、入学時に比べ2、3年次に能力の低下と見られる種目がかなり認められた。従って、成長発達の終末期を迎えていると思われる学生時代特に女子にとっては体力低下の認識が強まる事になるだろうが、昨今の運動不足傾向が世界的問題になっていることなどと共に考えなくてはならない。成長発達のとらえ方では確かに終末期かもしれないが、充実した機能などを含んだ総合的体力は完成期とも言え、それが運動トレーニングで当然保持できるものであるし、将来望まれる資質のうち欠くことの出来ない体力に自信の持てない学生のひ弱さは単に嘆くばかりではいられない。体力ときりはなして考えられない運動習慣の必要性を教科、課外などあらゆる方面から指導すると共に、自己の体力を客観的に判断評価できる為の測定やそれへの参加なども今後の対策として重要と思う。

(2) 運動の必要性について

運動は必要、不要、わからないから選択させたところそれぞれ95%、0%、5%であり、各グループでほとんど差がない。また体育や大学運動経験者にわからないと答える者が皆無に近い結果も認められた。窪田らの竜谷大学男子対象の調査でも、91%が健康で豊かな生活を送る為の内容として、日常的なスポーツ活動の必要性を認識しているとありかなり類似した結果と言える。運動は健康の必須条件であるし、学生自身体力低下を認識する中で、この回答は至当と思う。

(3) 運動活動の有無とそれに関連する事項について

運動することが①ある②ないの回答で理論的仮説を半々において χ^2 検定を行った。男子では中高経験者が②ない(5%の危険率で有意)以外は各グループ共5%危険率で有意に①あるが多い。女子は全体及び体育、大学経験者が有意に①ある、未経験者が②ない傾向を示している。

次に運動することがあると回答した者(男子80%、女子63%)に対し、その仲間、どんな形の運動か、どの位の機会を持つか、どの位時間をかけるかについて項目選択回答を求めた。

仲間は男女共クラブが約半数次にクラス、同郷となっており、何らかの理由で大学の運動クラブに入らない者は、クラス、同郷、下宿などの仲間と運動する機会を作っているようだ。運動仲間の重要なことは長沢らが体育学会で報告しており同様な結果といえる。

運動する形では学内でのクラブ活動が多い他は、学内外で有志、学内外で個人、シーズン野外スポーツなど平均的に分布している。運動クラブに入っていない者でも何らかの形で工夫して運動している姿が伺える。

運動する機会と時間が日常どの程度あるかについては学科別では体育以外はほとんど差はないが、運動経験別では、大学でクラブに入っている者は週3回以上で各1時間半以上、クラブに入っていない者は週1回前後が圧倒的に多く、時間は男子1時間、女子45分が多かった。

運動することがない者(男子17%、女子35%)の理由では男女共時間的に暇がない、仲間や指導者がいない、場所がない等に多くの回答が集った。

運動の必要性を認識しつつも実践している者は少なく、本学の体育施設等が運動阻害要因になっているとは思いますが、仲間づくり、運動する意欲、積極さがあれば克服できると思うので努力に期待したい。

(4) 興味を持って運動するための内容と性格について

回答は次の6項目とし選択させた。①楽しみやレクリエーション目的の同好会、②対外試合目的のクラブ、③自分の好きな運動、④軽スポーツ、⑤スポーツ教室、⑥

スポーツ行事。

男女共①③が圧倒的に多く次いで②④⑤などであった。小椋らの報告によれば一般に運動部には参加しなくて同好会に入ると言う傾向すなわち「脱運動部」化現象が顕著とあるが、その風潮を伺うことが出来る。運動クラブの持つ大きな意義や学校でのクラブ活動の仕上げという意味からもある程度の厳しさに向かう努力をして欲しいと思うが、意欲をもって運動が行われ質と量とが考慮されるならば、内容や性格はさ程問題ではない。いずれにしても学生の種々広範な希望に対応できる様な運動場面の設定が大学運営管理上望まれるもので、学生の心身の健康を阻害する因子を少なくする必要がある。

(5) 学内でのスポーツ行事への参加意志と希望について

スポーツ行事に①参加したい、②参加しない、③わからないで回答を求めた。①は男子70%、女子58%で体育は高く、人科、国社数理が低い。また運動経験がある者ほど①選択が多かった。本学では年2回スポーツ行事を開催しているが①回答者が真に参加したらより盛大となるうが、③回答者もかなりあるので何らかの啓蒙により参加する方向へ導きたい。

次に参加したいと答えた者に対しどんな種目がよいかをスポーツ教室、スポーツ大会に分けて調査した。スポーツ教室では、テニス、水泳、スキー、卓球、バスケット、スポーツ大会ではバレーボール、ソフトボール、バスケット、テニス、卓球など球技種目がほとんどを占めた。また男女ではさ程大きな相違は見られなかった。

(6) 卒業後の健康保持・増進について

卒業後、健康の保持・増進についての考え方を次の項目から1項目選択回答させた。①先の事は考えた事がない、②会社の厚生施設及びクラブを利用、③市町村の企画(スポーツ教室・大会)に参加、④家族や仲間と休日を利用、⑤商業スポーツ施設・アスレチッククラブを利用、⑥地域の同好会的クラブに参加、⑦自分で走ったり体操して健康保持、⑧その他

健康の保持・増進には運動が欠かすことの出来ない条件であるとの論拠からの設問であるが、①が男子24%、女子10%と多く、投げやり無関心な回答をしているのが気になる。また運動経験の未熟な者程この傾向が強いのは悪循環的に運動から遠ざかる行動や考え方になると考えられる。②④⑥⑦がかなりの高率であり、男子人科②、体育⑥、大学経験者②⑥、中高経験者④、未経験者⑦、女子④、体育⑥、人科⑦、大学経験者②⑥、未経験者⑦などが目立つ。

運動・スポーツは大きな目標を持つ以外、個人でそれ

に打ち込むことはなかなか困難であり、健康のための運動も真に運動不足に悩んで行うのでは悲劇的であるし、遅れがちである。従って大学時代から健康のために運動出来るような社会性、技術と体力などを養っておく事が望ましいと思う。

4. 体育会や運動活動に対するイメージについて

体育会や運動活動のイメージをⅡ-4-(4)調査内容で述べたように評価させ、性別、学科、運動経験別に各項目ごと平均値を算出し、さらに10項目の平均値、標準偏差を算出した。次頁の図1は代表的なグループをグラフ化して示したものである。

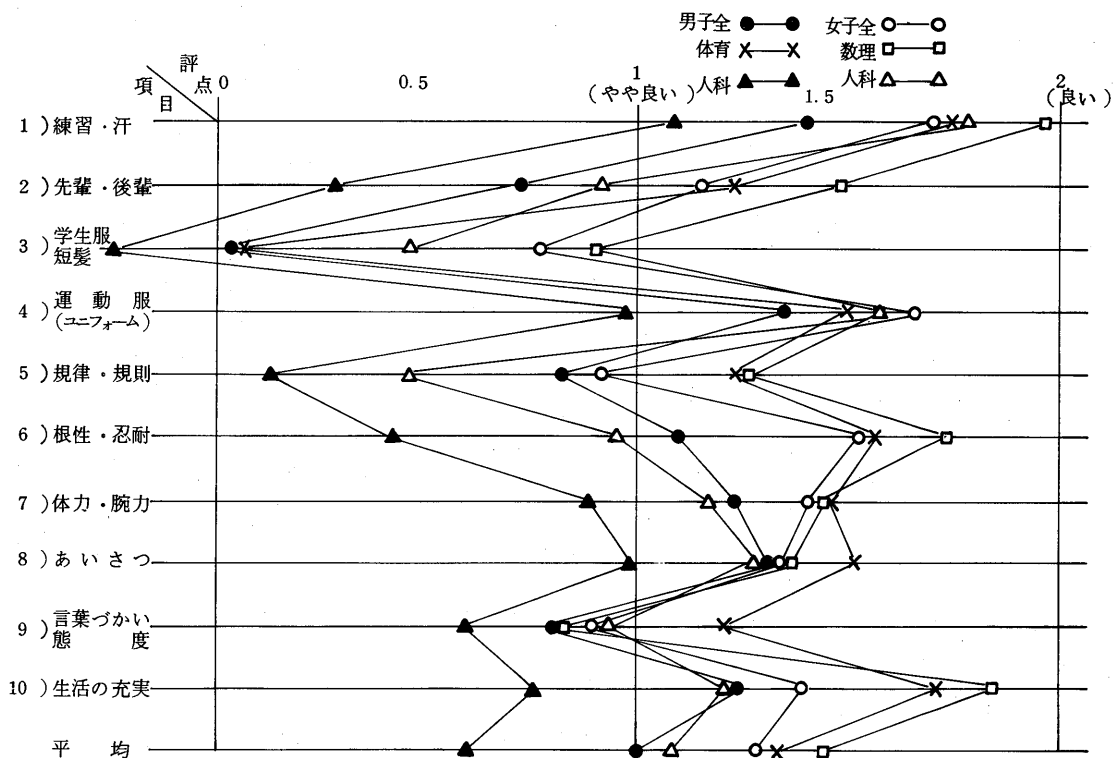
全般的には男女共やや良い以上の評点を示していると共に、10項目のイメージ傾向はかなり類似している。マイナスを示すのは男子人科の項目③のみで、あとはすべてプラスである。比較的低い評点(+1以下)は男女共(3)学生服・短髪、(5)規律・規則、(9)言葉づかいである。従ってスポーツが持つ性格やスポーツ場面に伴う事項については比較的寛容でよいと感じているが、しごきや封建的から発想される様なクラブイメージにはやや反発的と思われる。男子が女子に比べてマイナス的傾向を示したのはやや意外であるが、設問事項を女子はやや傍観的に評価したとも考えられる。グループ間の平均値差をt検定すると、男子人科が教育群に10%、体育に5%の有意水準で有意に低く、男子未経験者が大学経験者に比べ10%水準で有意に低い値を示した。経験などによってイメージが異なるのは仕方ないが、学科によって差が認められる事については、学科の性格上と言い切る前にさらに今後追求して理由を把握したいと思う。

IV. おわりに

余暇・運動活動や健康などに対する意識を調査検討するなかで、本学学生の実態をある程度把握することが出来た。学生時代に運動、文化的活動特にクラブ活動を行う事は学生生活を豊かにするばかりでなく、体力や健康に多大なる効果をもたらす。嘉戸の研究報告は、学校時代の運動クラブ経験は卒業後社会人としての運動・スポーツ活動や態度の変容にプラス機能を果し、断続のない活動を可能にする主体的条件であると述べている。

日本学校安全会の調査では、学校内の不慮の事故による死者が増えており、体育授業中や階段を上ったり、休み時間に走り回ったりして死んだ「急性心臓死」が大半である。しかも過激な運動ではなくごく普通のトレーニングや軽いランニングで多くの事故発生がある。本年9月17日付朝日新聞も「ある東大生の死」としてランニング中に倒れた学生について述べ、体を鍛える大切さを学

図1 イメージについて



者の所見と共に強張している。これらの事故が特に循環器系に多く、その主因はつかみにくいが、小野らが指摘するように運動不足や身体の鍛え方の不足、運動に対する無知さなどが大きな要因であろう。動いていて正常に機能する人体を考えると、動かさない事によって起こるトラブルも当然考えられるからである。

従って消極的な意味では死や病気に至らないように、積極的な意味では生涯の健康という点で運動を考えてゆきたい。そして今回の調査と共に、より一層綿密な調査研究を継続して教科・課外体育に生かしたい。また将来社会人として、指導者教育者として巣立つ学生に対しては、一層の精進を期待したい。

稿を終るにあたり、本調査に資料の提供と助言を下された東海大学体育学部助教授・東海大学学生生活研究所員・村川俊彦氏に感謝したい。

参考・引用文献

1. 岩原信九郎：教育と心理のための推計学，日本文化科学社 1965。
2. 阿部正臣他：立正女子大学学生の体力に関する調査研究，立正女子大学紀要第6集 p.93 1972。
3. 小椋博他：学生のスポーツ参加に関する社会学的研

究，日本体育学会第24回大会号 p.59 1973。

4. 川井忠雄他：健康と学生生活に関する基礎的研究 東海大学紀要 p.72 1974。
5. 嘉戸修：社会人の運動やスポーツ活動と学校時代の運動クラブ経験，体育学会第25回大会号，1974。
6. 小野三嗣：健康と体力の科学，大修館書店 1974。
7. 長沢邦子：女子短大生にみられるスポーツへの意識について，日本体育学会第26回大会号 p.160 1975。
8. 城戸卓男他：学生の健康意識とその実態について，日本体育学会第26回大会号，p.161 1975。
9. 川井昂他：運動部生活体験にみられる性差，日本体育学会第26回大会号，p.159 1975。
10. 窪田通雄他：体育スポーツ活動への参加実態と意識，日本体育学会第27回大会号 p.131 1976。
11. 長沢邦子他：女子大生のスポーツ参加とパーソナリティ(1)(2)，日本体育学会第28回大会号 1977。
12. 深町明夫他：文教大学学生の体力に関する研究(4) 文教大学紀要第10集 p.35 1977。
13. 東海大学学生生活研究所編：クラブ活動—教育の風化を防ぐために—，東海大学出版会 1978。